

VI 総括

上大作裏遺跡は南陽市大字砂塚に所在し、平成8年度に縄文時代及び平安時代の遺物散布地として登録された遺跡である。旧織機川の河岸段丘上に立地し、遺跡の推定範囲は東西約550m・南北約270mの広がりを持つ。今回の調査は一般国道113号赤湯バイパス改築事業に伴う緊急発掘調査で、遺跡に係る5,800㎡を対象として2ヵ年に亘り実施した。

検出された主な遺構は、縄文時代早期末～前期初めの竪穴住居跡と墓壇や土坑、同期末葉の陥穴、平安時代～中世に属する井戸跡や土坑と溝状遺構など、計500基余を数えた。出土した遺物は整理箱23箱に相当し、量的には第1次調査区の段丘堆積層内から一括して出土した弥生土器が主体を占めた。他に縄文土器・石器、古墳時代の土師器、奈良・平安時代の土師器や須恵器、13世紀代の産物と目される中世陶器などがある。これら遺構・遺物の所在から、本遺跡は縄文時代～中世にかけて断続的に営まれた集落跡であることが判明した。

以下では、第2次調査区で明らかになった縄文時代早期中葉～前期初めの諸相と、近年の調査において周辺遺跡でも出土例が増加した弥生土器の様相について検証したい。

1 縄文時代早期末葉の集落

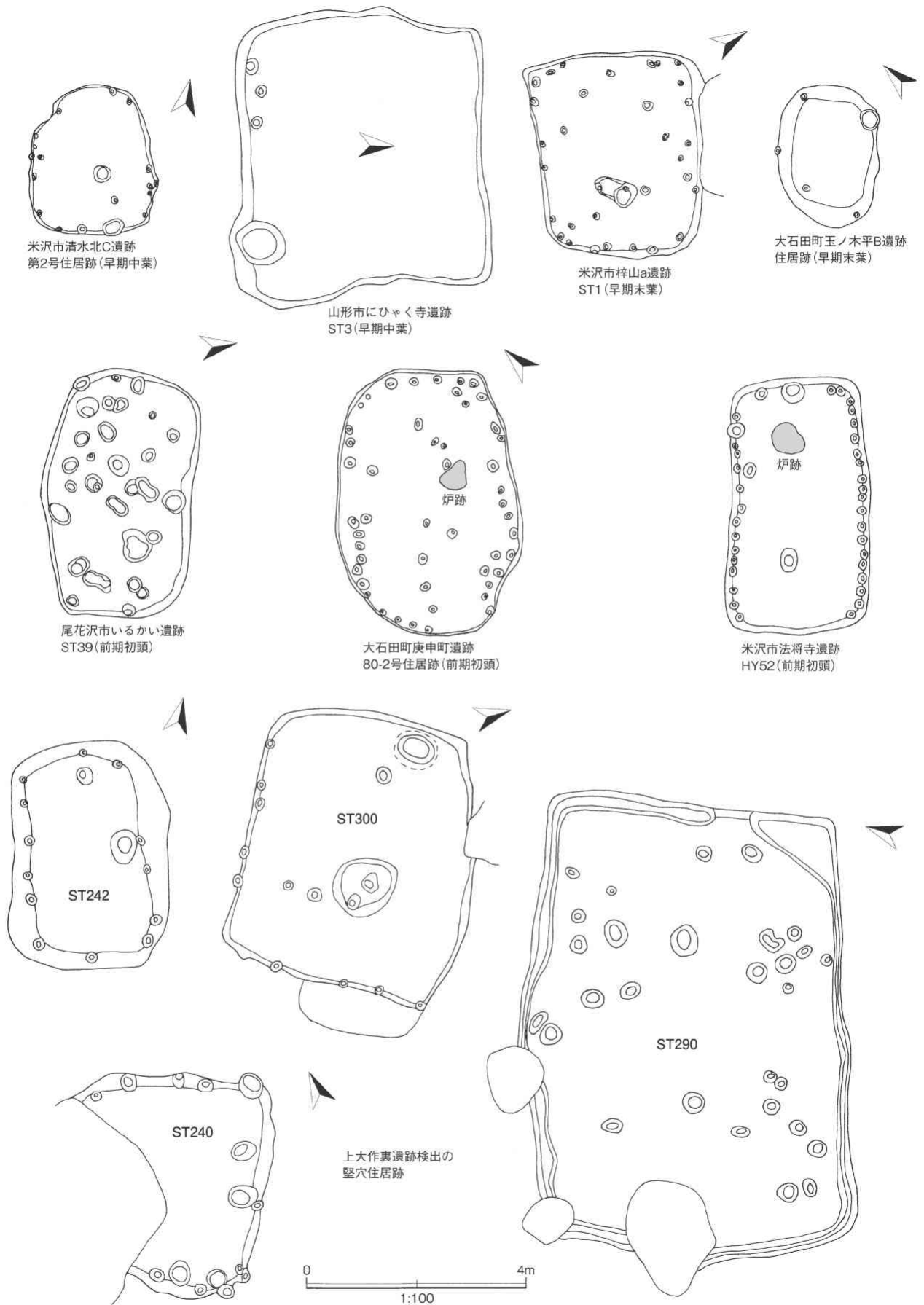
遺跡から出土した縄文時代の遺物の検討から、早期中葉～前期初頭と前期末葉～中期末葉の二時期に大別されることが判明し、断続的に集落が形成されたものと考えられる。大別した二時期に関しては、本遺跡より北方5kmに位置する若松山の台地上に所在する須刈田大野平遺跡（南陽市教委1986）と全く一致する。ただ、これまでに県内で確認されている縄文時代早期・前期の集落遺跡は、その多くが丘陵地や山麓部に立地しているのに対し、本遺跡は北側に聳える白鷹丘陵からやや離れた沖積平野部に立地する点が大きな相違と言える。

第2次調査区から検出された竪穴住居跡5棟のうち、時期不明な1棟を除く4棟は早期末葉～前期初頭の住居跡である。このうち、S T 240は重複により全形不明ながら、形態・規模や主軸方位などがS T 300とほぼ同一

であることから、同時存在した可能性が考えられる。一方でS T 242とS T 290は規模と住居構造が異なるものの、同じ主軸方位をもつことから考えれば、こちらも同時存在したか近接した時期での構築と見なすことができる。各住居跡の遺物は床面密着で出土したものはなく、S T 290において床面直上であった他は、覆土内に堆積したものである。したがって出土遺物は、住居が廃絶した直後からの廃棄物と判断される。住居跡4棟の掘り込みは、S T 242で確認面からの深さが約35cmを測る以外はいずれも浅く、地山直上層からの掘り込みであったにせよ、地山層を深く掘り込んでいないことが解る。この事象は大野平遺跡をはじめ、当該期の住居跡が検出された置賜地方の他の遺跡でも多く認められることから、この時期の住居跡は一般に地山を深く掘り込まないとの見解もある。

県内では前期初頭までに帰属する住居跡がこれまでに約50棟確認されており、最も古いものは米沢市八幡原No. 5遺跡検出の事例で、関東の稲荷台式に並行する早期前半に当たる。第48図には早期中葉～前期初頭までの時期に該当する住居跡で、全形・規模が明らかなものの一部を抽出し、本遺跡検出の4棟と併せて掲載した。平面形は隅丸方形ないし長方形と理解され、壁柱穴を廻らした住居が多いと言える。規模には大小の差異が認められるが、隅丸長方形の長辺または方形プランの一辺が4～5mを測るものが一般的と思われる。住居内に地床炉もしくは掘り込み炉を併設する例では、床面中央を避けて幾分外側に構築されるようだ。本遺跡S T 290は大型の住居跡で、検出段階では2棟重複の可能性が示唆された。床面壁沿いに周溝を廻らしているため、他と異なり壁柱穴で上屋を支える構造ではない。壁溝が一周する状況から1棟の住居跡と認識したが、一般的な住居の2倍の床面積を有する。出土遺物中に紡績具と推測される有孔円板が5点含まれる点などから考察すれば、共同作業場としての施設と想定しておきたい。

竪穴住居跡の近辺には袋状形態を呈する土坑やピット等が配されるが、遺物を包含するものが少ないために、



第48図 縄文時代早期中葉～前期初頭の住居跡

住居跡と共存して集落を構成したと考えられる遺構は限られている。その中で、長軸約2m規模の小判型を呈するS K 251は、早期に特徴的な形態の平基鏃14点が一括出土した。新潟県佐渡に所在する堂の貝塚（金井町教委1977）は石鏃の副葬例として著名であり、中期前半を主体とした土坑群の中に埋葬人骨を伴うものが7基確認された。このうちの1基の人骨頭部右脇に大形で画一性のある石鏃13点が束ねられた状態で出土したことから、副葬品と判断された。S K 251では中央部よりやや西側での散在した出土状況ながら、堂の貝塚例と共通した内容であり、出土品を副葬品と見て墓墳と認識した。またS T 290等からは、これら平基鏃と共にこの時期に特有な形態の、いわゆる松原型石匙が出土している。調査区から窺い知れる当該期の集落は、堅穴住居跡4～5棟に貯蔵穴を含む土坑が30基前後から形成されたと考えられる。これらが一時期の所産と判断し得る資料は少ないが、住居跡は一部共存もしくは近接した時期での変遷と捉えて大過ないと思われる。墓墳は1基のみが単独的に検出されたことから察して特有なものと認識され、一括出土した石鏃の様相などから、この集落における特異な人物の埋葬墓と把握しておきたい。

2 縄文土器の型式

遺跡から出土した縄文土器は、早期中葉～中期末葉にかけての内容を包括している。これらの大半は小破片で、全体の器形や文様構成の察知できる資料はほとんどない。ここでは、先の第V章-1に示した分類基準に対するの編年的な位置付けを行いたい。

第I群土器は早期中葉～末葉に属する。県内で当該期の資料が出土した遺跡として大野平遺跡のほか、尾花沢市森岡北遺跡（大類1979）、同市いるかい遺跡（山形県教委1983）、大石田町大畑山遺跡（加藤1972）、同町玉ノ木平B遺跡（小向1976）、村山市赤石遺跡（山形県教委1981）、同市山ノ内遺跡（加藤1982）、西川町弓張平A遺跡（西川町教委1980）、同町月山沢遺跡（山形県教委1980）、山形市にひやく寺遺跡（山形県教委1985）、南陽市月ノ木B遺跡（山形県教委1989）、川西町千松寺遺跡（川西町教委1980）、米沢市清水北C（八幡原No.24）遺跡（米沢市教委1976）、同市二タ俣A（八幡原No.5）遺跡（米沢市教委1983）、同市梓山a遺跡

（山形埋文2006）、小国町市野々向原遺跡（山形埋文2000）、旧温海町大淵台遺跡（山形県教委1981）などが挙げられる。1～3類は貝殻沈線文系土器に属し、1類と2類は関東の田戸下層式に併行する一群である。県内での出土例のうち、赤石・大野平・二タ俣A・市野々向原の4遺跡で略完形の鋭角的な尖底深鉢を認めており、沈線文や貝殻復縁圧痕文に加え、連続刺突文等により文様構成されることが知られる。3類は田戸上層式に併行するもので、東北地方南部の大寺・常世式に比定される。口縁部に描出された重層的な刺突文を文様要素とするが、連続した刺突文による意匠は前段階における貝殻復縁圧痕文の置換となったものであろう。4類の条痕文土器は、関東の子母口式～茅山上層式までの広い範疇で捉えられる。施文に使用された工具はサルボウ等の貝殻復縁によるものと思われ、異方向から施文することにより文様効果を高めている。5類・6類は茅山下層式以降の末葉期に伴うもので、東北南半ではこれと併行関係にある素山式～大畑G式に比定されよう。

第II群土器は前期初頭に当てはめられ、当該期の土器がまとまって出土した遺跡には尾花沢市いるかい遺跡（前掲）、大石田町庚申町遺跡（大石田町教委1984）、東根市小林A遺跡（東根市教委1975）、天童市上荒谷遺跡（山形埋文1996）、山形市にひやく寺遺跡（前掲）、南陽市大野平遺跡（前掲）、米沢市法将寺遺跡（米沢市教委1985）、同市松原遺跡（山形埋文1994）、同市梓山a遺跡（前掲）、小国町墓窪遺跡（山形県教委1982）などがある。1類は上川名Ⅱ式に比定される。図化した資料は小片で文様構成が不明であるが、撚糸圧痕文に加えて沈線文や刺突文などを組み合わせた意匠をもつと察せられる。2～4類は上川名Ⅱ式～大木2a式の範疇で捉えられるが、3類の羽状縄文は撚りの異なる2本の原体を交互に回転させた非結束の事例が主体を占めることから、大方は大木1式に含まれるものと理解される。

以上は土器型式に相当させた場合の編年的な位置付けであり、S T 240等の住居跡では早期末葉～前期初頭の土器が伴出している。これらは一時期の所産と目されるため、各文様の消長が影響した結果の共伴と思考している。

第III群土器は前期後葉～末葉の所産である。1類は細い粘土紐を短く千切って折り重ねた鋸歯状の貼付文が特